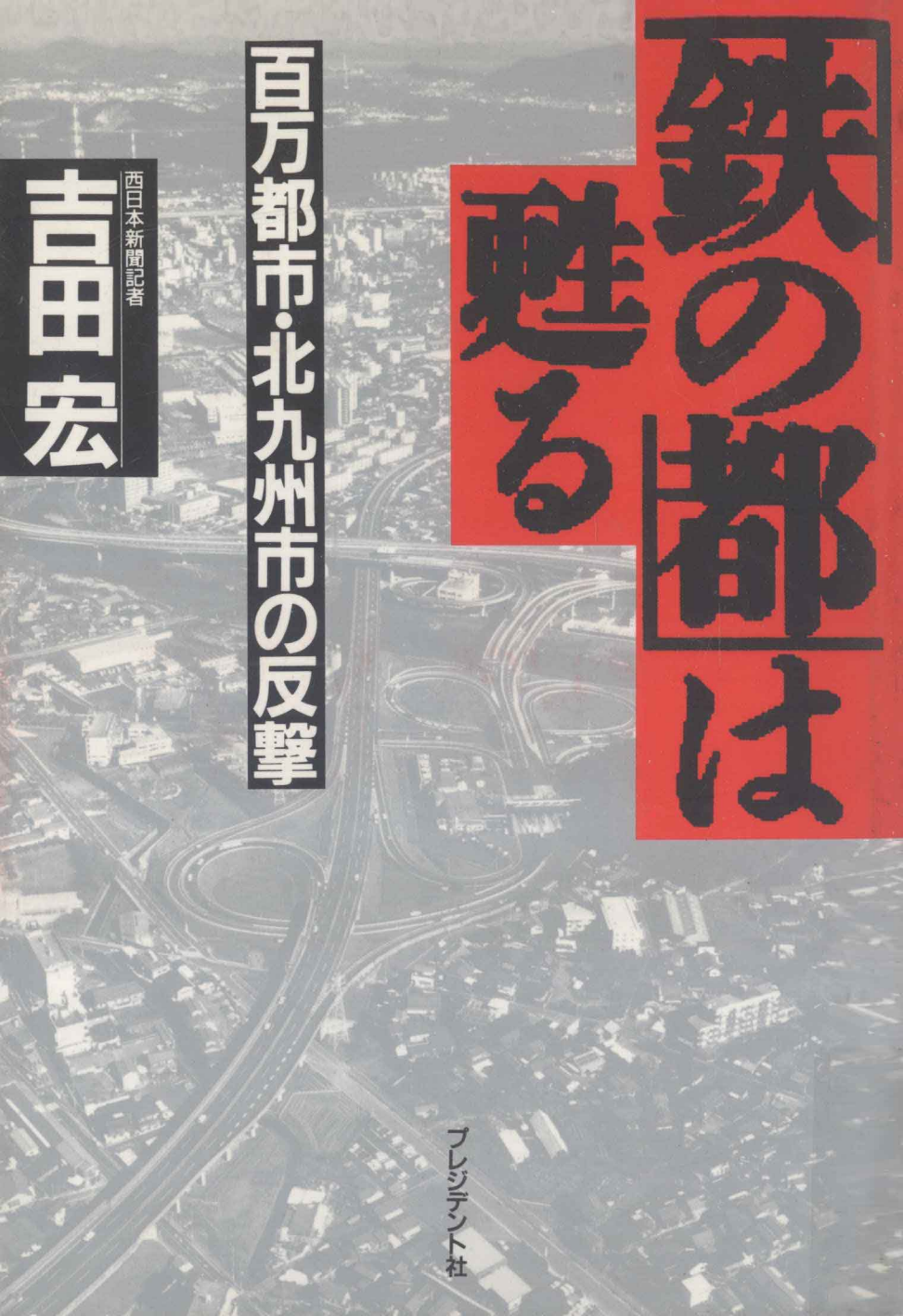




鉄の都は 甦る

百万都市・北九州市の反撃

西日本新聞記者

吉田宏

プレジデント社

KITAKYUSHU-CITY

吉田宏

西日本新聞記者

百万都市北九州市の反撃

鉄の都は
甦る

江苏工业学院图书馆
藏书章

プレジデント社

〔著者略歴〕

吉田 宏（よしだ・ひろし）

西日本新聞記者。

1956年北九州市生まれ。1980年慶応義塾大学経済学部卒と同時に西日本新聞社に入社。山口支局を駆け出しに本社整理部を経て1988年から北九州支社勤務。市政担当記者として、行政、都市開発などを取材。

著書に『東京に負けてなるものか』（プレジデント社、共著）

「鉄の都」は甦る

発 行——	1990年11月18日	第 1 刷発行
	1990年11月24日	第 2 刷発行

著 者——吉田 宏©

発行者——守岡道明

発行所——プレジデント社

〒102 東京都千代田区平河町 2-13-12

ブリヂストン平河町ビル

電話：代表 (03) 237-3711

振替：東京 8-35607

印刷・製本——中央精版印刷株式会社

ISBN4-8334-1394-9 C0036

Printed in Japan

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

はじめに

すっかり錆びついた巨大な高炉が立っている。北九州工業地帯とかつて呼ばれた工場群を見下ろす高台に登れば、そこに暮らす百万人の人達の営みが、うっすらとたなびく煙に透けて見える。「日本の四大工業地帯の一つです」と小学校で教えられ、テストの白地図にその名を記す時、幼な心にもどこか誇らしい気になった。いったい、いつからこの街は「四大工業地帯」でなくなつたのだろう。

九州の最北端に位置し、本州と接する北九州市は昔から眠らぬ街であつた。一九〇一年（明治三十四年）に官営八幡製鉄所が生まれ、日本の工業近代化の起点として約一世紀にわたつて鉄をはじめあらゆる工業製品を送り出してきた。高炉の火は絶やすことはできない。永遠と燃えさかる炎の前で、労働者は眠ることなく石炭を放り込み、体力が限界に近づく夜明けに次の者へとスコップを引き継いだ。

筑豊の鉱夫たちが地底深くから掘り出す石炭が川を下り、夜昼なく工場に運ばれる。「高炉の炎」と「地底の闇」は、男たちの汗によって無限の連鎖を作っていた。

「二十四時間働ける」飲み物、二十四時間営業のスーパーが日本の至る所に出現し、世はまさに「二十四時間型社会」の到来を告げている。しかし、北九州は一世紀も前からモノを生み出し、モノを作り続けるために二十四時間眠らなかったのである。

その「モノ作りの街」が、高度成長以降の構造転換の影響をまともにかぶり、低迷に喘いでいる。サラバ重厚長大——。モノ作りの大切さを説いてみても、経済のソフト化の波には抗えず、明るく楽しいあぶくのような繁栄を享受する街だけが、さらなる肥大化を続け、労働者の汗は尊さを失おうとしている。

東京を訪れ、「小倉は知ってるけど、北九州ってどこ？」と言われたりすると、氣力が失せてしまいそうになるのは私だけだろうか。門司、小倉、戸畑、若松、八幡とそれぞれに個性の強い街をつなぎ合わせた結果が、無機質な顔のない街を作ってしまったのは皮肉である。

しかし、書こうとすると決って溜息まじりになるこの街に、最近明るい光も見えてきた。底を打った人々の気持ちが上向き、知恵を出し合って都市再生を図ろうとする動きが出てきたのである。その牽引車として行動力を発揮しているのが、昭和六十二年春から一期目の市長として旗を振る末吉興一なる人物である。

九州の首長でいえば、大分の平松知事は「米国製の四輪駆動車」、熊本の細川知事は「ヨーロッパの高級車」といったイメージがあるのに対し、この末吉の場合は小柄だが動きのよい「日本

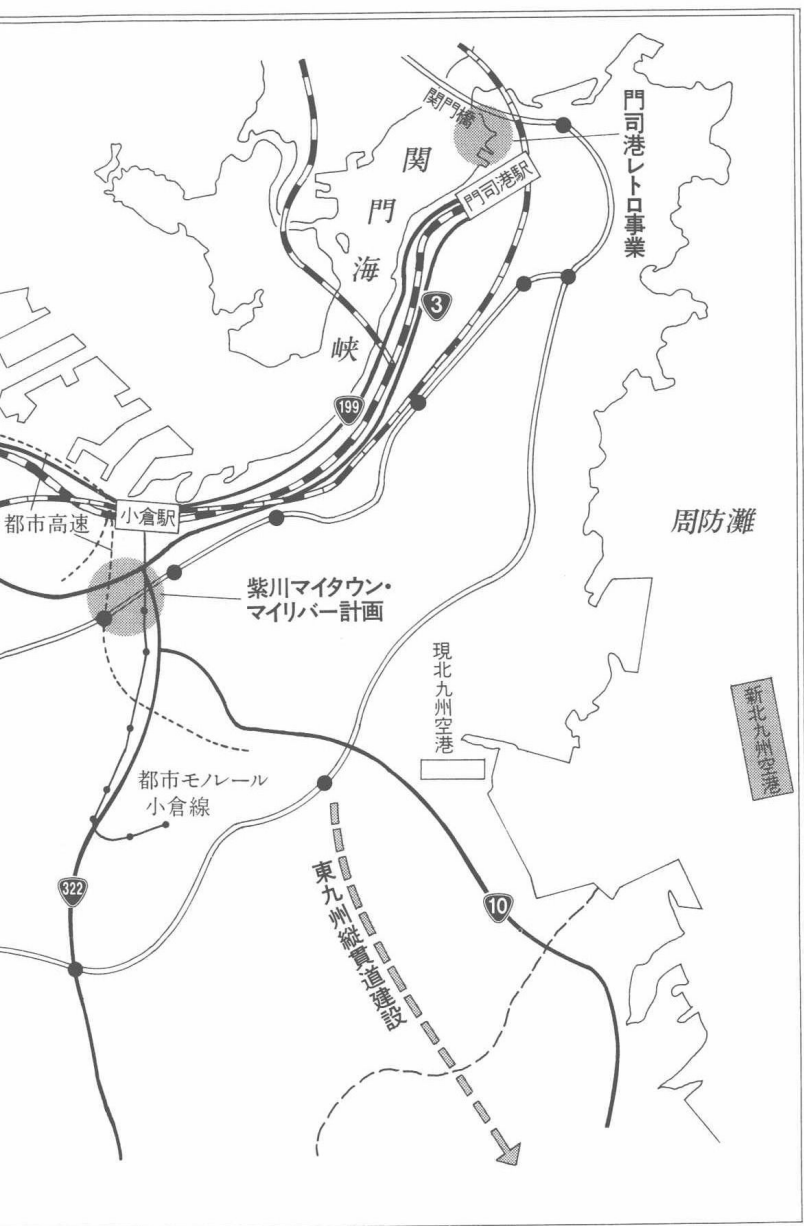
製1600GT」だろうか。反応が素早く、小回りがきく。「末吉1600GT」が就任以来、沈み切った街を思う存分ひっかき回し、「宇宙人だ」と言われながらも、市民が結集して作った「北九州活性化協議会」などと共に再生への道を走っている。本書は、そうした末吉をめぐる行動、再生の道を探る百万市民の熱い思いや動向ダイナミズムなどを綴った記録ノンフィクションである。もちろんここでは、バラ色の夢ばかりを語ってはいない。この地で育った一人のジャーナリストとして、問題は問題として指摘したつもりである。

本書が、北九州市を生活の場とする人たちの励みとなり、刺激となれば有難い。また、東京一極集中の陰で同じような課題を抱えて呻吟しんげんする他の地方都市の参考になれば幸いである。

最後に、執筆のアドバイスを頂いた川崎勝人氏、プレジデント社の天野恵二郎氏、また資料整理などで格別の協力を得た妻・智子に心から感謝を捧げたい。

一九九〇年 秋

吉田 宏



白島石油備蓄基地

響灘

響灘埋立地

ひびき動物ワールド

学術・研究都市
整備地区

洞海湾

若戸大橋

黒崎駅

スペース
ワールド

プリンスホテル

北九州道路

JR山陽新幹線

千代ニュータウン

九州縦貫自動車道

JR鹿児島本線

199

3

200

はじめに

第1章——家が買える最後の百万都市

周遅れのランナーの魅力……………1

第2章——「スペースワールド」が運ぶ夢と現実

宇宙への発進……………21

第3章——船出した「門司港レトロ」

甦った港町の宝物……………45

第4章——ペンシルベニア大との連携プレー

アジア研究の拠点に……………65

第5章——「北九州国際音楽祭」を引き金に

「文化砂漠」の名を返上……………87

第6章——「ひびき動物ワールド」の教訓

工業都市の「緑と動物の楽園」……………107

第7章——迷走した「白島石油備蓄基地」

海を売った代価……………127

第8章——JRR小倉駅周辺の再開発

「顔のない街」からの脱皮……………149

第9章——高速道路「元化への道

転がる赤字を止める……………169

第10章——繰り返される「福岡との綱引き」

都市間競争の断面……………189

第11章——「響灘地区」の無限の可能性

二千ヘクタールの巨大な母艦……………211

第1章
——家が買える最後の百万都市——
周遅れのランナーの魅力



紫川リバーフロントの完成予想図

過密化は全国の大都市の共通した問題である。道路が混む、水が不足する、土地が高過ぎる……。特に住む家がないのはボヤいても始まらないけれど、あくせく働いて家一軒さえ持てない現実には、労働意欲を失う人たちも多いはずだ。もちろん家が欲しければ田舎に住めばいいじゃないか、といった反論はあるだろう。でも「どうやって食べていく?」——。この解決のつかないテーマにぶち当たった時、人々は家をあきらめて都会の仕事に没頭するか、少々の退屈は我慢して田園生活を樂しむかの選択を迫られる。

北九州市は政令都市の中で唯一の人口が減る街である。他の大都市では考えられない現象が起こっていて、だからこそ活性化が叫ばれもする。しかし、視点を変えれば、働くところも住む家も買える「理想的な都市」の側面も残している。暴力と煙の街と言われたのは昔の話。口八丁手八丁の市長が、ひっかき回してくれるお陰で、少しずつではあるが新しい魅力も生まれようとしている。

帰ってこんね

「一戸建てが二千五百万円で買えます」。大都会に住む人にとってはまったく信じられない安さの住宅をPRする冊子が、東京や大阪で話題を呼んだ。売り込んだのは北九州市の住宅供給公社、平成元年の暮れも近づく十一月半ばのことである。

下水道から学校、公園、病院、高速道路に至るまですべてが揃い、百万都市の中心地まで車でわずか二十分と近い。北九州市八幡西区の「千代ニュータウン」と名付けられた分譲団地の募集であった。

二百平方メートルから二百三十平方メートルの広い敷地は、二千五百万円から二千八百万円という価格にもかかわらず、あまり売れ行きはかんばしくない。そこで「いっそのこと、都会の連中に声を掛けてみようか」と試みにパンフレットを刷ってみたという。

その時点で全体計画の千五百戸のうち八百戸は売れており、残り七百戸を対象にした売り出し

だったが、全国紙が大きく取り上げたこともあって、供給公社には首都圏や関西から問い合わせが殺到したのだ。

そのほとんどが、遠のいていたマイホームの夢が退職後なら実現できるかもしれないと、余生を送るための「Ｕターン組」ではあったが、「本当にそんなに安いですか」と電話口で確かめる声は、半信半疑の気持ちでいっぱいのようなだった。

都会の人たちが驚くのも無理はない。首都圏のサラリーマンが一戸建ての家に住むことなど、未公開株にでもありつけない限りとても無理だし、マンションだっておいそれとは買えない。住宅ローン地獄に苦しむか、ウサギ小屋でも何でも少しマシなものを見つけて借り、お金は車やレジャーに回し、「自分の家なんて別に……」と悟りを開くか、道は二つに一つである。一生働いても家一軒買えないニッポン経済の奇妙さは、ここで繰り返すまでもないだろう。異常な地価の中で、それこそアリやハチのようにあくせくと動き回り、それでも「都会に住んでいる」というささやかな自負で自分を支えている姿は、地方に住む私のような者の目からは「御苦労さん」としか言いようがない。

パンフレットには草むらに立つ少年が描かれ、「帰ってこんね」と郷愁に訴えかけていた。一極集中の逃れられない巨大な渦の中で喘ぐ首都圏の人たちは、どこかホッとするものを感じたのではないだろうか。集中、競争、効率、上昇といった「成長志向」に凝り固まった心のしこりを、

多少なりとも解きはぐず作用をもたらしたかもしれない。

北九州市は、百万都市である。この町は高度成長を支えた北九州工業地帯の企業群と共に成長し、西日本では最初の政令都市として発展した。それが今、成長を続ける他の政令都市と比べ、唯一の人口減に悩む百万都市となっているのである。

素材型産業の不振、お隣福岡市へのミニ集中など、原因はいくつも考えられる。その端的な表われが人口減であり安い地価にもつながっている。

「北九州市は一周遅れのトップランナーだ」と言った人がいた。過酷な都市間競争の中で他の政令都市と同じように走っているのだが、実は一周遅れでやっとなつていっているという意味だろう。そういえば、着ているランニングシャツもちょっと煤すすけて一昔前のもののようにだ。鮮やかな原色をちりばめた他のランナーたちには、どこことなく見劣りするようにも見える。

しかし、表情は決して暗くはない。ゆったりとした自然や住環境に暮らす者のみが持ちうるゆとりと柔和さが、汗にまみれた顔には滲にじんでいる。「家の買える最後の百万都市」。それが周遅れのランナーが、負け惜しみでなく胸を張れるゼッケンなのである。

土地局長から転進

この「周遅れのランナー」のさらにリーダーとして走っているのが、北九州市長の末吉興一で

ある。

小柄だがエネルギー、眼鏡の奥からギョロツと目をむく顔は決してハンサムとは言い難いが、機嫌よく笑う時は昔の駄菓子屋のオジサンのように愛敬でいっぱいになる。かなり後退してしまった頭髮と口を尖らせて熱弁をふるう姿が連想させるのか、内輪では「タコの八ちゃん」などと親しみを込めて呼ばれることもある。ま、本人は決していい気分ではないだろうが、自説を曲げず相手を納得させる時の「口八丁手八丁」ぶりも、このニックネームにつながっているようだ。

昭和九年九月二十日生まれ。本籍は北九州市小倉南区城野にあり、幼い頃小倉で育ち、後は福岡県宗像郡や大分県の竹田に移った。

「父親が事業に手を出しては失敗してね。本当にひどい貧乏をしたよ」。そう言うだけで、末吉は概して昔のことはあまり語りたがらない。大分県立竹田高校から一浪して、小倉高校の補修科（明陵学院）で学んだ後、東大法学部に進んだ。

大学時代も貧乏は続き、月謝から生活費まで、そのすべてはアルバイトの家庭教師をやって捻^{ひね}り出した。戦後の影をひきずった昭和三十年前後の典型的な苦学生であった。

昭和三十三年四月に建設省に入省。九州地方建設局に配属されたあと、二十六歳の若さで、あのダム反対闘争で有名な大分県の「下釜^{しもづ}ダム」の用地課長に抜擢されたのだ。相手の懐に飛び込

む柔軟さと、いわゆる高級官僚離れた人懐っこさがデッドロックに乗り上げていた難交渉の最前線にこの人物を必要としたのだった。

その後、建設官僚の道を順調に歩み、昭和六十年九月から翌六十一年四月までの国土庁土地局長を最後に退職、さらに翌六十二年二月の北九州市長選で革新統一候補を破って五期続いた谷前市政からバトンを引き継いだのである。

少し長くなったが、以上が末吉のたまかなプロフィールである。重要な点は、彼がエリート官僚としての強烈な自意識と、「家に赤紙が何回もベタベタとはられた」と述懐する生い立ちに由来する反権力的な思考とが、矛盾しつつも共存しているところだろうか。

要するに「威張る奴と金持ちは嫌い」な半面、時として相手には「高圧的」と受け取られかねない態度も出てしまうのである。親しみやすい風貌とは裏腹に、悪く言えば難解、よく言うところのある人物である。

ついでに書いてしまうと、霞が関仕込みの洒落な冗談が得意で、しかも思ったとおりに口をついてボンボンと飛び出す。今風に言うところ「同じノリ」の人には好感が持てるのだが、誰にでもこれをやってしまい、たとえば年長の方から「年下のくせに無礼な男だ」と思われてしまうことも多いのである。

本人に悪気はない。シャイな性格も併せ持っていることから初対面の人とは横を向いて話すこ